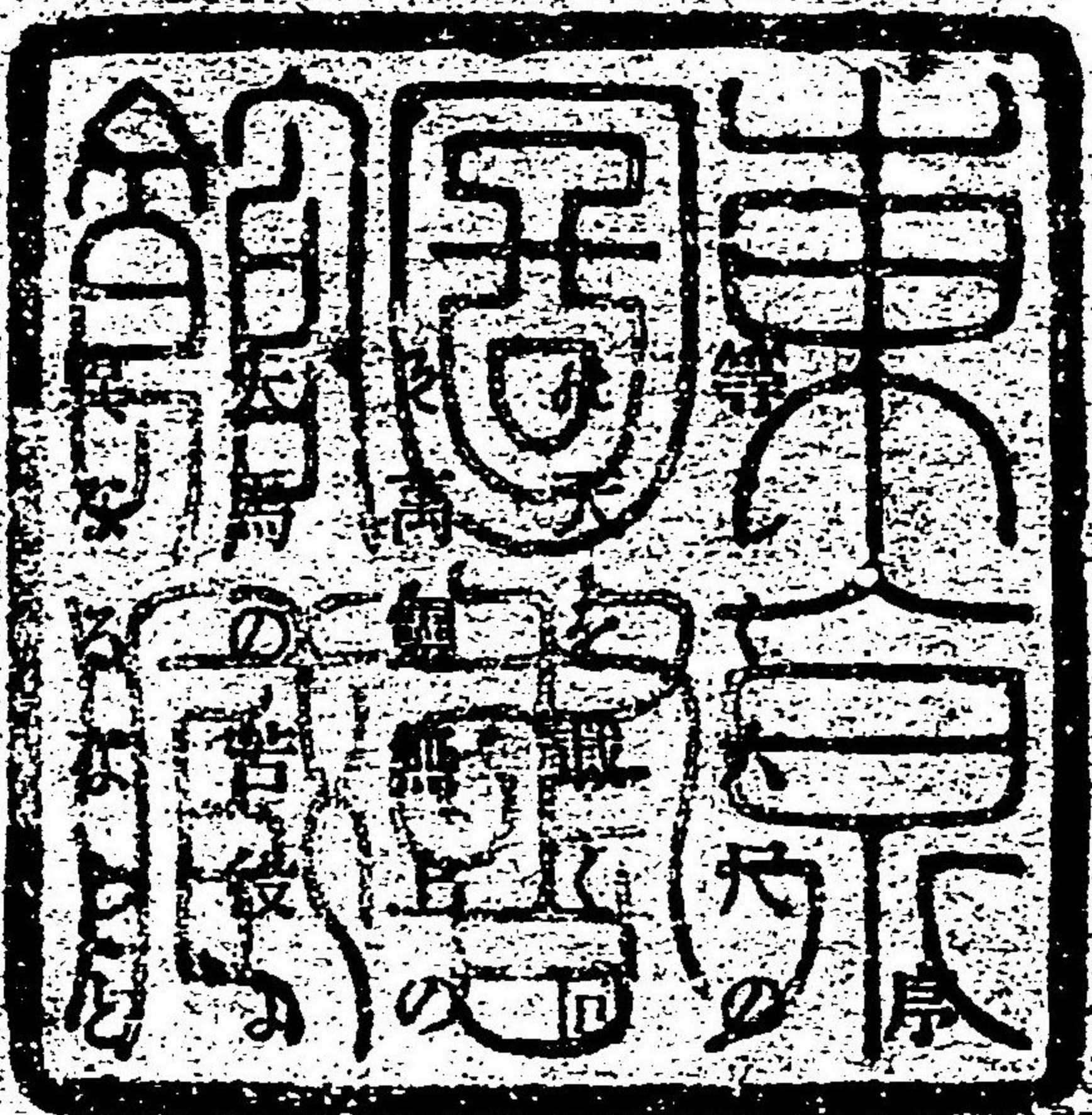


19-144 No. 986

文明疑問上篇

松原岩五郎著



論

論を以て同じく一升の水を飲み共に五十年
 一種の人類あれども一方は王公貴紳と稱し
 一方は下郎匹夫と稱して殆りも
 歡樂を盡し一方は下郎匹夫と稱して殆りも
 沈む富豪貴人も下郎も匹夫も天の賦權あり
 言ふも上流富貴の人ハ大厦を築して珍味も
 飽き綾羅錦繡身を纏ひ、美術妙巧心を喜ばし、日常此管弦交
 際の歌舞、遊興恣ひまゝ、豪華を闘はず分限も有り終日終
 夜事より事お移りて眠食さえも不自由な短褸蔽袍、一年三
 百六十六日勞働、役々としを暇なきあり甚だしきは濫褻猶

肌を隠くすも足らずして一片の襦袢、空しく路傍に背仰す
るものあるは是れ當世文明と稱する西方諸國の世相とし
て上は層々下は段々、貧富貴賤の等差人生の享くる幸不幸
の運も斯の如く懸隔あるは驚き人のたる次第と言ふべし」
夫れ天子の室茅茨剪らず王公下賤を俱お歡樂を等ふした
りとの大古聖代の美風として學者此唱道する處なるが今
其真疑の須く擱き近來西方諸國に在つて社會改良論を唱
ふる中にも人間社會を平均して貧富貴賤を差別なからし
めんとて時として宗教者の如き頗る問題を提出することな
るが願ふは哲學上の道理を引き來つて人間社會を矯めん
と此議論として其方案の随分面白く机上の談に於て頗る
妙なりと雖も扱手實際に行はるべきや

抑も人間社會は貧富は格別あるは寧ろ造化自然の勢ひと
も言ふべきも此より人々情意の觀念に由て差をなし欲
心の運動は隨て別をなし優勝劣敗の作用を以て大量大利
も浴し小量福少く人々個々、働きの廣狹は依つて富貴とな
り貧賤となり高尙となり野鄙とあるの約束天地自然の運
行なればこれをして平均ならしめんとするも到底望み得
べき限も非ず、人文進むも隨つて人生の福利の次第も一方
も偏し人間界の大半常も空を攫んで苦むの次第は逆も止
むべからざる事あれども此間も在つて只願むべきものは
人生の良心、能く其分限を知るも在り是れ我輩の議論の定
まる處あり

然るも愛も最も困難なるは一般人智の進歩として元來世

の進歩は人生の福利を容易ならしめんとする義に於て古來
 識者も唱へ又世人を疑はざる處なれども是れは甚だ眼界
 の狭き話と言ふべし抑も人文漸く進んで人心次第は功利
 を傾き一方又は社會は表面増々華美を以て人生の嗜好増
 進するに引替へ一方又は優勝劣敗の作用を以て社會の利
 福は一方又は偏ち富豪愈々富んで貧者次第は零落するの勢
 なる其際は錯雜繁忙に開き處して人生の念頭須らくも忘
 れざるも此の利欲の根性身の福利を目的として事の損益
 を類敏に解する其微妙の機らきの人生自愛の觀念、功利忘
 れんとして忘る能はざる處なるは既に人間社會の情勢に
 於て普く福利を許さず然かも一般の人は驥々として權
 謀なきに於ては向來如何なるべきや、人界多衆の失利、歎き

て嗜好を絶ち目を隔して周圍の紅白を斷念すべきや氣遣
 いしき事俱なり

近來西方諸國に於て賤富平均論の如き共產黨と云ひ社會
 黨と云ひ孰れも不祥なる破壊主義にして概ね無産貧困の
 不平者が賤富偏重を嫉みたる者、當時西洋諸國の權門豪族
 の廣大無邊の土地財産を擁して文明此利器は利し開化の
 歡樂を逞ふし工業商賈の利權を握つて獨り天下此利權を
 專するより自余の小民の如きは勢ひ自家の勞力を悉く
 るへの有様にして辛ふして餘命を繋ぎ生涯々として暇
 なきは尙佳なり時としてハ文明利器の作用は壓倒せられ
 競争場裏に破北して忽ち衣食の道を失ふる如きは誠な憫
 然の事よしと文明の進歩次第に表面の華美を離れし、往來

交際至て繁く殊に上流社會の交際の如き其贅豪奢麗ある
 事一夜の燕會に數萬金を費し小作數千万の膏血を納涼一
 發此烟花は消するが如き奇觀に直接に不平黨の怨恨を招
 く處よしを不平相結んで稍く秘密の舉動に及ぶものゝ如
 し

西洋諸國の小民等も事々觸れ隨時不祥の企をなせば人文
 運勢の今日最早如何ともす可からざる事なれども願て東
 方日本地方の情勢を見れば人民今尙太平の志を歌ふて兎
 り角今日迄和氣穩かなりしに結構至極の事と云ふべし
 然るに日本開國二十年漸く西方文明國の事物と共に又無
 形の風俗思想の如きもの迄傳來し政黨と云ひ結社と云ひ
 演説と云ひ討論と云ひ甚しきは政談杯と稱して思慮分

別もある可き人物等が無遠慮にも天賦人權を唱へて世の
 良民を驚かしたるが如きは文明の風潮とは云ひ乍ら又
 苦々數次第と云はざるを得ず

抑も我輩の志願として文明を談ずる世の學者論叢に向つ
 て起問したきは種々様々あれども先づ第一は君等の常は
 幸福と稱しる文明國此美を談ずる其中に就て政治の美法
 律の美、自由人權の美、道德風俗の美其智力と云ひ氣力と云
 ひ類りし其美を美として之を稱賛するに本來如何ある了
 見も出でたるものか勿論西方諸國の盛運今日此勢其由來
 は誦れなきに非ず、道理と規則を以て人間世界の表面を整
 え之に文明の美を裝ふて交際軍事の奇觀學術技藝の妙巧
 あるに至極面白き話にして方今世の勢も於て特は務むべ

きの段なれども之を美として習ふよ於て何ぞ風俗思想に
 要用あるや民権自由の必要あるや我輩の解せざる處なりし
 抑も斯も一大黄金界を形造り斯の生をしり斯も近つかし
 むるも此なりとは哲學上の話にして道理の極端を指した
 るものならん文明論は斯の理を原つひて至大善美の幸福
 を文明進歩極限となす蓋し此邊の談に頗る高尚にして今
 此人間社會の事とも思はれざれば其眞疑の談は須く無益
 此事として擱き手近く今日の實際を就て人生の福利の昔
 りと比して果して如何、我輩の研究せんと欲する處のものな
 り
 眞理審美の高尚談は爰よ之を曰はず凡そ人間世に處する
 此眼目として貴紳と下郎も智者と方盲も一般に福利の滿

此と聞ふは今日の通俗なれて事ある普通の情勢なれり人生
 の心よだるを足らざるもの福と不幸は別るゝ地よして人
 間の心として更よ疑ひあるべからず然らば即ち人間社會
 を平均して不足不平の夥しきは古今孰れも在るやと云ふ
 よ今日西洋諸國に於て眞實文明の利福を浴する者は人口
 を平均して二割を過ぐ可あらざるや昨今争ふ可あらざる
 實數なり我輩熟らゝく西洋文明流の生活の模倣を就て能
 く其巨細を吟味すれば人生の福利の寡る古へよ昔よりし
 が如し成程器械力の進歩は一般人生に利便を與えたるも
 のにして鐵工電工の如き文明開化の利福は疑をなき實效
 されども本來人工分の進歩は其眞實人文繁多して人車の用
 便普及之に依賴し謀て尋常普通の用具として之を要した

るものなれば其利便の唯之を要するの多小は随て福利を
異にするものゝ如し、又政治法律分は進歩の效ある現今其
美なるに至つては上下貴賤の別なく王公貴紳の錦繡も匹
夫匹夫の破簞も等しく私有の財産をれの一黠毫法傷まへ
からそとして一般之を重んじ之を守るの細故ある私有
生命自由平等天賦杯の意味を解して之を保護するの嚴重
なるは道理上至極尤もの話ふして天賦の人間世は処する
の約束正は然るべきなれども實際は於て其効力利福の及
ぶ処は大に異なるなきを得ず、即ち富豪長者の金玉は其身の
愉快と共に財産生命の權利司法に依頼して之れを守り之
れを子孫に傳ふるの效福あれども、貧者の破履は主人自ら
ら之を繕ふ、願ざるか如し今其事柄は異なれども先年英

國倫理に於て是の如き事の進展を以て一少女を拘引したるよ
り一時世論を引致し既に内閣大臣の進退も及はんとそ
る程の大角となりし如き、其道理上人権を重んずるの類
故なるの誠は有難き事なれども然れども本来人生の禍福
を吟味して其實際を乞へ此一女子の不幸位は實は倫動
市中の無職貧困は内は幾万人あるやも知るべからず兎も
角文明の効力利福は常は一方に偏して人間社會の多數は
潤はざるの疑ひとあき事よしと翻て其不幸の點を數ふれ
は機械力の爲り衣食の道を失ひ資本力の爲りも勞力を
盡ひ尽され企業の範圍を狭めて競争の熱を熾まし直接間
接に利福を剝収し去らるゝの始末は劣敗社中の免れざる
處として文明進歩して人生の福利を容易ならしめんとい

古來學者の宿論をれども人間社會の實際に於て其然らざるは正しく衆生群居の情勢に於て優勝劣敗の作用に依るものと知る可し

右は人生此禍福を正面より解して其平均を尋ねたるものなれども人生禍福の分量は唯是れのみならず、人智進んで精神知覺の觸感次第に現敏となるは性理の定則を以て人々自から其心を咎めらるゝの煩悶苦限に不完全なる人生此免かれ難き処にして願ふは目今西洋諸國不平黨類を以て富豪長者の奢移を嫉み王公貴紳の歡樂を妬んで之を妨げ、時に下民職工等が増給を口にし全盤停工を昌へ地獄に高きを訴えて官府に迫り或は徒黨不穩の舉動を以て口を極めて罵詈譁、往々公器をして其所置まざるを以て

如きを畢竟此邊の煩悶に原くるものにして其周囲の飾飾身の醜態を映して堪え難き故なり、名利の心減りて之を得る能はず、道理の心逞しくして之を満る能はず、直接間接自から咎めらるゝ此苦悶抑も又煩はしき次第と云ふべし

然るに今日の學者論叢が漫々理論の是なるを主張し未だ物跡の數理も明かあらざる日本の人智に向つて自由人權の道理を教ふる如き前後本末の緩急を誤るものよきを殊に封建瓦解之餘未だ士流は死處も定まらざる今日に於て政權云々の言をなすは尤も危險の事と曰はざるを得ず、兎も角近來政事上の談論稍く喧しく少壯血氣の躍るにつての動もすれば身屈無氣力杯と稱して政事を談せざるものを以て一種の不具者を見做すが如きは苦々政事と云

はさるを得ず、外論政事を論じ自由を論ずるは其人の勝手
とは云ひ乍ら之れを爲り日本固有の美德を傷しめる如き
は誠し堪へ難き次第にして彼の一時世上に喧しかりし秘
書出版事件比加き併と土地の物議りと稱して一地方の分
別をも定むべき人物が僅う一二政論者は意見案を求めん
したるの次第、矢張り不完全なる人間の常として施政上絶
倫非凡の妙案あるに非ず、顧ふに尋常普通の眼映して理
を非の駁判も容易あるの理論、在程珍奇の物も非ざるべ
きよ其之れを要むるの功なる、實は言語全關よしを不祥極
まる手段と曰はざるを得ず是れとても我輩直接は政論を
駁すも非らず唯日本國民の風俗として其心事の甚だ面白
からざるを論ずるものあり

蓋し國を開いて文明を興つて今日自由人權を談ずるは國
民の分としを正し當然の事なれり素より是れを是非する
も非らずと雖も社會の進歩も自から一定の法則あつて
要相成りて起るの順序なるも今の日本の所謂文明購求の
地位に在りて萬事萬端消極の運行免かれ難きの時をれば
法理論の表面は多少醜しくとも兎も角斯の民の不利も
在らざる豫當坐の處分を運らすは尤も十全の策よしを民
情に應じて只榮利の一方も走らし富を貧との分合を悟ら
しめ頼がて文明相應の富限を作り開化の世も後くれざる
生計の道も相立ち果して人權自由の必要を合點したらば
其時こそ徐ゆるみ之を附與するも決して晚きも非ざるべ
し

こととは奴隷他役の非倫不條理にして文明平等の心よ潔
しと爲さる処あれどと實際其主人他役の手心よ由ては好
んで業し役し楽しんで勞ふ服をよ非ずや蓋其不倫となすは
唯其買賣の意味を以て其所有權を逞ふせんと此所存より
之を慘酷と扱ふが故あり奴隷無智にして人權の理由を解
せざるは格別其主を主として之れを頼み爾かと其本心を
妨げざるよ於てハ須らく人間社會の妙王風として遠慮を
く此方便よ依頼すべきよ在り
今夫れ千伊の艇百尋此淵より漁獵し來る佳禽珍魚雪を踏
き氷を滑りて捕え侍たる其苦辛は抑も何者なるや、是れを
捕ふるの苦勞のこれを食らひんどの快樂よ頼ゆるの當然な
れどと蓋其長者の食卓に日常佳肴珍味を新にし漁獵本人

の膳部よの曾つて鮮肉だよ上らざるは何ぞ漁獵の無智よ
して自家の福利を窺収し去らるゝは憐むべきの談あれど
を又一方より考ふれば此輩の樂境濁酒よ在るや、麥飯よ在
るや、芋よ在るや味附よ在るや將た又睡眠在るや此邊の境
遇ハ又格別よして到底王公貴紳の得て與る処よ非ず、蓋し
審美の理論よ依て眞疑高卑の談を外としを人生快樂此程
度よ於ては左程異なるものよ非ず、身ハ人權を剝かれて道
理上既よ禽獸世界に墮落せる奴隷も、無智無術の匹夫賤民
も、王公貴紳の知識學者も、眞實苦樂の宿る処ハ皆是全一に
して奴隷必しも禍ひあるよ非ず豪者必しも福わいなるよ
非と唯其本心よ存する樂魂の位置を轉倒すればこそ不足
とあり不平となり不愉快となつて禍ひの根を醸すよ在れ

の、天下の士人として愚よ處するの覺悟大よ此邊の玩味を
 要する事なれば要するよ無智の無智として擱き爾も其
 境遇は他人の眼に映して如何なる越きありとも先づ其本
 人さへ満足して意心成活、泰平よ休息せば結構至極此事に
 して是れぞ正しく人界の妙機方便、依て以て浮世の潤きを
 致し人事の賑しきを爲し、宇宙の萬像枯れず廢れず、人間社
 會此表裏よ虚實空眞、變幻無量の妙味此存する處なり
 文明進歩して優勝劣敗の作用轉だ其勢を逞ふし無慈悲よ
 小量の快樂利福を奪ひ尽すの今日迎を斯る泰平の議論を
 話すべきよ非ず、畢竟此説の如きは當世學者論輩り文明よ
 狼狽する有様よ對する一幅は圖書として見るべきのみ故
 よ我輩の志願は人智此進歩は敢て必要をらずと云ふよ非

ず唯増進したる人智よ満足を與ふるの見込當分愚昧なき
 を慮るも此よして、今日日本全國を平均して(北海道を除く)一
 方里の人口二千人口とい歐洲諸國よも珍らしき程の大衆よ
 して容易ならざる人口、耐りも其資力を云へは國家の根本
 たる一般農民の經濟として秋獲収め冬期よ尽その勘定
 なるは昨今争ふへからざるは實話なれ、文明を誘導する
 は正よ當世の務として之を誘導するよは銳意あるべく、急
 進よても劇進よてを此邊の談に我輩此關係する處よ非ず
 只これを誘導する方法如何よ在り、優よ閑月を送る上流士
 人貴賤の身お取つての民權自由女權擴張此議論も、隨分面
 白かるべきも滿天下の生民未だ人權理論よ遑らずして聳
 る世間の人事よ忙く其人事一とは正よ營利生計の外殆ん

を他あしと云ふべき程のものなれば眞實君等か斯の國も
向ふて文明を誘ふんどの願あるならば、眞然たる(日本人智
の全躰に應じて)權利自由を唱ふるも不可なり高尙ある天
賦理論を説くも又不可なり其誘導の妙策として先づ尤も
大の好む處に隨て利益利福の鏡ある方法を教ふるこそ
最徑捷の手段と云ふべきなり

以上の人事進歩の概論としての西より文明思想は急進を
攻撃しよるの次第なれば江湖或は偏頗極端の議論なりと
之を不快とよる諸彦とあらん我輩とても今の時世に當
つて筆法を曲げて古流を談するに甚だ面白からず然りと
雖も人間社會の實效の道理を論の外に幾重おも事柄次第
のある事なれば人事の關係を一概に論述すべきは非ず尙

又此外は歐米諸國は現状不惑て富は分限と勞働は關係、土
地の廣狹と人民氣質の優劣、卑屈無氣力從順無智の人口過
剩の世の福利、共和政治の衆生群居の國は行はれざる理由
等は是れを本論人事篇に於て論述すべければ單に保守、抑
壓、強制弱服などの意義を解せざる様異れ異れを祈る恐な
り

開化の事物を未開の國も移し之をして文明其域も化せん
との天地自然の道理よして乱すべからざる理數なり然れ
ども是れは唯世の事物を自然の運行に任せて傍らより
其勢ひを評したるものなれば勿論利害得失杯の談はこれ
を度外に置きたる事を知らざるべからず
世も或は文明進歩を以て無上の福利となし之れを求むる

の手段も依つては多少は利害の顧みるも足らずと云へる事あり一應尤も此話なれども是れ又高尚論にして人事は錯雜を洩らしたるものと曰はざるを得ず文明福利談はこれを別の問題として擱き抑も今の日本國も於て其文明は事物と稱する一切の事柄は寧ろ皆是れ西方諸國の風物に變相とも云ふべきものにして其眞も非らざるや蓋し疑ひある可からず故に文明の眞も販る迄は其間には是れを變相の世と稱して萬事萬端消極の運は免れ難き時代あれば利害得失の談も就ては利得の割合少くして損耗の分量方外も夥しき其數は争ふべからざる處として我輩聊も其消極の運も就て開陳とべし

抑も日本開國二十年其間人文の變化したるもの随分夥しく西方は風物隨に入り隨て弘まり有餘と云ひ無形と云ひ一風一物利あり害あり中より全く見込の無き者迄も只文明熱の流行も伴れて傳來し日々は新なる其風物の過半は嘗一時狂熱の爲めは無益に財を散らし跡を収めたるの次第、素より凡百の變相、千萬害は存する其中も就て尤も見易しき事例は彼の交際流もして今日朝廷も外國交誼も止むを得ず目を瞑して財を敬するあるも一般人民の如何に解したるや、産あり智あり少しく當世風も秀でたる人物所謂紳士貴嬢と稱する輩が忽ち俱樂部と稱し公會と稱し公園を設け別業を築き、日常の生活も舶來品を需要し、帽傘の附屬物も至る迄日本製の品は面白くらずとし之を嫌ふに至るとは抑も又驚き入つたる次第も非ずや

本來世々交際此仕組公園を設くるの必要の其實西洋諸國
 熱鬧の市府に於て人事の種々を繁忙なる商工諸職人の如
 き其業務の煩雜に加へて終日空氣此秘塞に閉ぢ籠められ
 神氣堪え難く或は製造工作の業跡至て劇く烟を吞み塵を
 呼吸し、面目煤を爛り一年一日規則と時限を法を守り身軀
 疲れて勞に堪え難きに至り一定に休日を幸ひ遊戯場に入
 つて鬱を散ま或は公園に追ふて神氣を爽やみするの用な
 れども、人間社會の情態は左様參らずして富者樂んで貧者
 苦むとの次第の序論の冒頭を述べる如く日常の歡聲、公
 衆の歌舞に遊興は恣にするも、其の獨り富豪は在つて貧者
 は生涯苦辛に終るは今の西洋諸國此風俗としを一般に馴
 致したることなれば今日富あり權あるものは黄金の集散

自在にして、勝手次第に豪奢遊を尽し貧者は貧に塵埃に埋
 れて終世社會の表面に立つ事能はざるは又如何ともすべ
 くらざる處なれども、顧て今の日本社會の富限より見るも
 事情此邊此事成就して少きは遠慮あつて然るべき事、非
 ずやとて毎度世論の喧しき處、成程交際は人事の要なれば
 我輩決して之れを無益ありと云ふは非ず、二夜三日青樓に
 遊興し、購買を整へるを習慣あり、部屋を請して煎茶を勤
 め、閑話轉々婚談を實ぶるも又習慣なり、仰山にそるも儉素に
 そるも其間差しを效否は著しき、非ず西洋諸國と雖も上
 流豪族の一門を除いて中等社會は一般を云え、バ明友俱樂部
 部は會食し知己と公會を談笑するも其散財決して奢なら
 ず通常の珈琲を喫し常備の樂器を彈じ談笑の間は自在に

歡を尽しと去るのを故に要是れも重きを置かず爾かも眼
 中文明人なく、手輕の間も味ひを存し以て徐ぞろも交遊を
 整ふるも在り開國の商師故五代友厚氏が表ては絹布を綾
 ひ裏らも綿衣を纏ひ貴紳と談し礦夫も接し、奔走自在の間
 も人望を博したるの實も大悟の事もしも消極時代の美德
 と云はざるを得ず

近來又頻りも改良の議論起り事物萬端改良の良も就か
 るとて上流貴紳の間も毎度發議のある事なるが是れも總先
 だつ消費の點も在り、中就て演劇改良は如き又最も大なる
 東京市區改正の如き成程倫勳、巴里の比較を取れり劇場の
 建築廣大ならず狂言の仕組高尚ならずして内外貴客の觀
 も供し難き都合もあらん、又市街の區畫錯雜偏疎商行會所

八方も散在ししを商運上も不便利の次第とあらん衛生警察の
 事も就て不都合の廉もあらん我輩も於ても自から説き
 非ずと雖も此邊は談は随分條理混譚のある事なれば成
 否計畫の談は須く別問題として要するも今の日本紳士の
 資格として其全軀の動作を評すれば學者も無學者も智者
 も實際家も皆文明消極の運動を催ふして火事場も等しき
 此世の中も侵々開化の花も咲ふとい、抑も我輩老者の解
 せざる處なり

右の消極の命數の尤も容易なる處にして小學兒童明か
 解する處なれども眼を轉して民属の情勢如何を見るに猶
 又文明野漸の風潮として之れも觸るゝものは隨之陰密も
 消極は運動をなすものゝ如し即ち其隨一として先づ法律

上の變相を述べん。元來政府が法廷を設け裁判役を置くに要するは人民の爭論を勸解し双方互に其心をしそ息のしめんとの有難き主意に基いたるものなるは民属は如何に解したるもや、近來一般に從訟の風行はれ少しく入込たる事件とあれば控訴上告も屢托せを先づ北の方三里の治安勸解廷を出頭初めとして南の方十里の始審裁判所も廻され其れより西方五十里の法廷も控訴し夫れにも未だ飽き足らず終には東方二百里の大審院を上告し東西南北訴訟用書類を頭に掛けて日本八道を行脚せると同然時を消し金を費し甚だしき訴訟入費の爲めは双方俱々身代限りをおと杯の奇談もあり或は又俗に所謂三百代言杯と狡智滑辨の奸物が無智の良民を欺罔して事件を

故造し中よの本統の生業なき奸智の無頼漢が恐くも天保嘉永時代の古公事を捏造し來り、山林伐材の件、山草刈採の争ひ、無盡頼母子講の悶着、或は網乾境境界の紛義、川尻土砂揚げ置きは難題等一向値なき事柄古えならは濁酒一酌に間よ仲裁に纏りたる些細の事柄迄も態ざく官府の手敷を煩ひし一村奉つて四十七人、簞笠に儘みて裁判所門を潛り入る杯の趣きは毎度珍らしからざる事相にして泰西文明國人民約束の大典として頼んで以て安心する此法律、法を司る此の裁判に仕組も東方日本國も移し來りたる其當坐の利害、正よ此此邊の事相も顯ひる、処よして事に觸れ物も遇ふて良民次第も安息の性を磨滅し、三百又三百を造り出し、無垢の如來も一と度ひ法廷の門を潛ぐれば

魂魄變じて惡魔となるの情勢、裁判所内妖怪の巢窟とい田舎地方も免れ難き處よして本家分家屋號の争ひ迄を訴訟を仰ぐ杯は苦々しく、數次第よして我輩の毎度患る處法律顧問ボアソナードが神社佛團の前よ敬禮を表し日本人民をしゑ崇信の念を固めしめんとするも畢竟此邊の心配よして要とするよ無益の争ひ、其利害此識別の裁判官吏の眼力と、狀師代言者の分別を以て容易あれども判官は身よ權限を帯びて心事の運動自在ならず、勸解の廷よ於て利害のある處を和解すると人民の建訟これを悟らざれば如何とも致し方をき譯けとして只顧むべきハ有識の法理家代言師は徳義あれども此輩聖徳の君子非ず人間社會の情勢よ見ざるなきの建訟の風ハ本來原被両人の情勢非ずし

て舉る却て、其間よ一種の場合、次第此ある事ありと云ふ堪え難き事供なり
去り乍ら我輩今日敢て誰れを咎め誰れを怨むと云ふよ非ず只西方風物此變相として不完全ある人間社會の情勢よ消極の運此免れ難きを叩こつのみ
文明論の向ふ處ハ我輩老者の敵し得べきよ非らずと雖も全躰當世風の人物は豫ねく俗世界の事務よ適せざるこそ遺憾なれ、大凡そ人間社會の事は文明此世も未開之時代も其繁閑經重の差こそ概して之れを俗なりと言はざるを得ず抑も開國以來世運次第よ文明よ移るの勢にして人事の關係漸く其面目を改めんとする此時勢、隨て人生心事もこれよ處するの覺悟をあらは當世の務ふして、西洋普通

の知見を要し洋書を読み洋語を語り彼の國の地理歴史より現今の商賈工業文武の事政治宗教風俗人情の有様一通りの心得は固より要用の事として後來社會の表面より立ちて事をなさんとするの存分、閑りよとべき事よ非ずと雖も扱今此日本社會を平均し須く仕事の性質を吟味し其實際を云へば右に知見の先づ以て無用なりと云ひざるを得ず否無用あるよ非ずこれを施すの地なきよ苦むもの、如し今官邊の事ハ須く擱き先づ民間の業よ就て貿易商行銀行會所或ハ或ハ製造工場の如き専ら日新の業務を營む場所よハ業跡頗る當世風の人物よ適しよる仕事もあるべしと雖も暫く下つて一般の人事を言へハ舊來の習慣ハ容易よ脱却せずして業跡平均十中八は猶未だ舊日本の觀、其儘よ

して先づの當分、
 遊學七年玉を擲ひて郷里ハ歸り縣國の會議よ奔走する豪士人の事は茲よ是れを言はず凡そ今日の實際よ於て普く民事よ接する當世風の人物ハ既して事務よ不適當と言ハざるを得ず蓋し今の青年若輩ハ俄かよ文明を見たるものよして其文明の風を喜ぶこと甚だしく只管これを高尙者美れものと思ひ過して却て人事の繁多を忘れ人間社會の事跡を分別するよ違わらずして俗世界の關係を等閑よ附したると此あらん今日地方よ於て富限を稱するものは大抵地主よして幾多の小作人を扣へて盛衰を卜するものなれば小作小民の關係實に重大よして成程其人望を賣らざるべからず是れ都會の富限と異なる処よして豫て土地

買買の盛んなりし時も地方は依つては成宜く扱へ目よし
て少々の利益は知りつゝ見捨るが如き場合あるを畢竟小
作人の信用を重んじたる處にして、文明野蕪の風潮も此邊
の事より頓と何等の沙汰もなく今日迄平穩に結び來りた
るに地主の爲めより先つ以て目出度次第にして日本小民
の柔順得難き美風と云ふべし

然るに近來文明流の風物専ら上流社會より普及地方富隈に
如きも郡長役場向きの往來より市町村會議の件衛生の
事、警察の事、万事萬端の世話漸く開化風の下地を組織する
ととなりしより自然老輩の當世の務めより後くれ所謂青年
輩の世とあつて家事を整へたる次第となり彼れ是れ随分
現則立つたる事より直及び小作小民に接する自然嚴重よし

て、所謂法を解して情を見ざるの越えをなし果して意の如
くならざれば土地を取り擯げざるの難儀及び利益を
買擯せざる馬首類を引押へる事は督促をかるべきや裁判
廳の不祥の沙汰のなるべきや文明開化の誤解は堂々
たる學者士君子も有勝るの事况んや文化の普ぬらざ
る地方人士の事なれば中又は訴訟事件を以て一種の手柄
らの如くも見做し血氣を噴やつて無益の争論のあるべ
きや氣遣ひじきの次第と云ふべし兎も角當世風の若輩が
舊日本の事務に接せば間接餘々の方便を忘れて直接性急
の道理規則に拘はるや蓋し疑ひあるべからず
小學校の教育の今の若輩は基礎として其れより文明
の風俗を養はれ方今道理を失はるの最中、所謂論議の美を

りと雖も世務の實際は至極拙よして俗世界の人事は無限の情實あるを解せざるものゝ如く、上邊の風物、年と共に稍く文化と趣くと雖も下邊の情態習俗は依然として動りず此時と昔つてこの若年輩、道理と規則を以て能く人事の至點を誤らざるや米國の人、日本の士人を評して議論は妙よして仕事は迂濶なりと云へり蓋し彼の國一級の風俗は童女七八歳に至れば學校教諭の傍はら銘々牧場を受け持ち朝夕家畜を飼牧し運動休暇の時刻と雖も空しく遊戯を消する杯、仕事は無く乳を絞り毛を剪り或は市中に日用の雜品を賣り歩く等、富豪金穴の子息も續々職工の伴々れも其勞動勤勉は於ては少しも輕重するなま、十歳未満の小童に應分の資金を興ねて勝手氣儘に商賣を作らせ傍らよ

り其成敗を見せ子弟の捷否をせざるなど、隨分危險の語よして日本人の眼に映じれば寧ろ其親達の無鉄砲を駭くなるべしと雖も是れ畢竟其生活の自立を重んじたる処にして人生行路の事跡大概此の邊より慣らし來る事なれば青年も及んで其身心の獨立尤も完備よして今の日本人の如く學文と生活の鈎合を失ふ杯の事も多く議論と實際と齟齬する如き談あるなしこれよ就て最も奇談の先年我が學生某が「ボストン」府へ留學の際夏日休暇を幸ひ農地見聞を思ひ立ち田舎地方を周遊の折、近邊の或る避暑場へ立ち寄り異國の景風視んとて聽て旅亭へ寄き身仕度せんとする時、偶と其家の給仕を見るよ豈計らん三日前迄同學しめる生徒の仲間よして爾も「ボストン」有名の素封家、金

其の子息もて在ければ其の大きき其故を問ひたれば少
 年は苦へて曰とさればなり昔年の時の外暑氣なれば定め
 て避暑の客と多らんと思ひ旁たくく休暇の間空しと暮
 とも本意あければいで此間に一ト稼さして後半期の學
 費を作らんと斯くの思ひ立ちたる次第も候なりとて平氣
 の顔色して述べたりと首へり米國少年の志氣眞率として
 其心る掛けの周到ある概ね斯の如し然るも今此日本の風
 義の如何ある間達ひにや兎角も學風を尙ひ少年字を知り
 書を能くすれば其人柄の如何も關へらず一般も之れを稱
 賞し其家の子弟として讀書讀釋に美しと道理規則を談
 とれば殊も出立の譽れを博し人も賞め己れも喜ひ以て知
 らず其も其間も折世界に冠たる人物を養成したるの

歌ずべき次第と云ふべし地方の一話も先年抽米納の際
 夫れ夫れ戸長役場あて現米を取り立て最寄りの港とまで
 船送りの運びよ致し、時よ重大の件なれば萬事小都合の無
 き様とて郡役所より監督の爲め殊も重役數を派し、船が
 て船を着し掛員を現場へ出張してそこく見張の折柄、中
 仕の一人來り告めて最早揚げ切りたれば船を廻へしてと
 宜しきやとの報告も然らば一と先づ點檢すべしとて計舞
 よ取り掛らんとは爲たれとと扱座右も十露盤もく何分大
 數の事なれば重役此方々にと稍々當惑の跡なるより、仲仕
 は潮の加減もあり船頭を待たその氣の毒なりとて足許と
 の砂を掻き均らん指もて數を数どり何千何百俵如件とて
 毛頭違算をき速者も重役の面々は唯茫然として顔見合せ

大坂の月給千百萬の遣理を解せし身も在り乍ら其事務上の頓智は日履稼ぎに下郎も及ばざること心外あれど竊かに愧入さりと云ふ事ありされり人事は實際の無限の情實あつて其情實の至味は到底法理理論の得て解する處も非ず商人も一刻千金の掛引あれば百姓町人其れ相應も商機の手都合あり風の模様潮の加減は船頭の身も取りえは重大の件もして其情を見るとき見ざるとも依つて随分利害のある事なれば上位に在つて下流も接するものも能く此邊の事も用意して周到精密も臨機應變の處あらん事を願ひしけれ兎も角當世風の人物の實現在り來りの事務を以て不規則不完全となし稍とそれは改良と稱し道理よく世間を事休慮の如くあらすとて人を叱咤し、買買の

用談み怒聲を發するが如きは以ての外の事にして、進歩改良の談に別條、苟も今日此實際も於てこれを以て普通此事とし萬事習慣も依頼して事を辨する限り一刻半時を是れを等閑よせざること今日の務もして一日情を見るとき見ざるとは正しく一日の利害も關係するの明白なるも今日の青年輩の只管高尙も走り、人文進んで人生の念頭も忘れ難きを此の損益は數あるも此輩の文物進んで却て損益の敗も洩れ勝ちありとは抑も我輩の解し能はざる處あり且又今日上流も立ちて下風も臨むもの、有様の概して言へば在來人事上の階級の其儘もして其人物の賢愚、能不能も兎も角も苟も目上の人も對しては萬事遠慮の汰沙あるは今日の俗事も於て一般の情態あれば地主が小作も接し

戸長下役人が人民と接するも猶在來尊卑の差別を乱さず
 小民の身に於て聊か無理難題と思ふも規則嚴重過ぎざる
 所分なりと託つを上邊の仰とあれば止むを得ず黙し難き
 を啣ちを澁々畏りを表するの風なれば其人を得ると得ざ
 るとよ依ての隨分民属の疲勞又關係あるとあれば當世風
 の人物の最も注意すべきは在りたとせば收租法の如き酒
 と云ひ煙草と云ひ醬油菓子の如き政府の役人ある地下は民
 者と接して規則を應用するに付ての利害尤も此れ等間税
 物課税の利害は既し西洋學者の議論もあれば我輩爰も是
 れを言はず、今其施政の方法は就て其要を求めんよ中は就
 て酒税の如きは目今殆んど歳入四分の一あるも及ぶ程の大
 枚あれば其筋は於ても豫て手厚き御主意もあり

營業者を於ても能く其規則を守つて不都合なきは施政此
 圓滑國民は美德として祝すべきの段なれども獨り遺憾な
 堪へざるは抑も收税吏が法の正面を解して大政府の意を
 玩味せざる處か且に人民が法則を守るに嚴よして却て自
 來の運動を束縛せらるゝに致す處は此間兎角に嚴格な失
 するの次第今少し便宜の手段はなるべきやと思ふ場合
 も少なからず千石の酒を醸し百石の焼酎を蒸溜し店の主
 人として職の杜氏を兼ね、顧客の用談、雇人の監督、帳簿の始
 末に至る迄業務萬端一身に辨するは田舎地方の常態、又斯
 くせざれば勢い事の脩らざる次第もあり旁々以て繁忙は
 身、蒸米の加減より泡沫に浮き横横に至る迄も注意して類
 般に奔走する其最中、忽ち検査吏の入來と聞ひて百事を擲

ち一と通り黙檢の終る迄の其間の始終附き添ひざる可
 りず至急の場合も引き取り難く要事を託して座を抜き難
 きも畢竟平素は嚴格を憚りて然るものよして百姓町人
 の舊態を存する今日毎度有り勝ちの詰なり彼れ是れ身權
 の自在を失ふの情實をあり且又酒造家の極意は調合調味
 杯と唱へて他人の得を知らざる方便利巧は依頼するの常
 なるは一朝吏員の面前に遠慮して此機を誤り計らざる失
 敗を蒙り後は大に迷惑を惹き起す事ありと云ふ蓋し此邊
 は業躰は就て其實際を曰へば不規則を以て用を辨せると
 稱するも可ならん程の事なれば或は無理に苦んで其法則
 は始終するは人民の卑屈あるは相違なしと雖も卑屈無氣
 力は是又別段の話なれば要するは事収税吏は權内は在つ

て存する限りの願はくは能く斯の民の情を酌んで其運動
 を束縛せざる様規則を骨とし手心の肉とし爾かも人情を
 陥らす威權は誇らず其舉動言語は圭角を作らず威嚴は裡
 より洒落を含み其人は接して其事を取り以て斯の生を疲
 らしめざるこそ望ましかれ

元來租税と稱して人民の手を離れて政府は庫に入る迄の
 間の中々以て困難の仕事にして席上學者が論ずる如く無
 雜作なるも此は非ず

殊に酒税の如きは格別にして素封家が地租を納むる如
 き裕なるも此は非ず嗚へは田舎地方にて五百石の酒を醸
 し農民を相手として是れを賣捌くどせんか其税を言へり
 四、五、二千圓是れを三期に別て前期二度は千圓後期は千圓

を納むるの定則あり勿論我輩税の經重を言ふも非ず只其納期は紳縮の自在あらん事を祈るに在り、田舎一商人の分限を以て一時は千圓の金を纏むるの難易千圓は金の時の相場にして凡そ米六百俵の價なれば中々容易の事に非ず一より十、十より百も致入迄の辛苦、日限を極めず奔走困頓、中よの余義なき金をも間合せて知りつゝ、高利を償ふの不快、商人の身も取つての尤も忌むべきものなれども斯く爲されは勢い用事辨ぜざるが故も止む無く是れも依頼して疲勞も疲勞を疊ねるの難義、面倒工面其工風の他人の得て解とる處も非ず又素より人よ知らしむべき事も非ず期日よ及んで辛ふじて纏り兎も角見苦しからざる様これを繕むば外聞勞を其内幕を言へ日本全國十中七の納稅者の

大概此の如きものと断定して數も大差はなかるべし以上は納稅者次第も就て特も立論したる譯なれども實際に於て其財を集むるの困難と利を獲るに容易ならざるの義は今の下邊民衆は有様な於て疑ふべくもあらず今日政府が規則を以て下も接するは正も當世の勢も於て止むを得ざるの次第なれども然れども苟も法の許を限り聊る習慣も依頼して其利處を發見次第隨處隨時は手心あらんとこそ願はしけれ故も我輩は漫も文明流の議論に感服せざるものなり

元來政治の美とは理の表面を云ふも非ずして實際に於て其利福の擧る處を指すものなれば施政の要は便宜の手段を誤らざるに在つて其美とは即ち民の效福あること疑ひ

も亦き道理よして、西洋諸國よ於て政體論の喧しき共和と云ひ王政と云ひ代議と云ひ其休載手段は種々様々あれども其目的とする處は皆是全一よしを民利の一よ歸するよ在れば時よ實際よ於て規則制裁よ拘らざる場合をあらば之を臨時の手心に附とるこそ當世此事なれ

文明論の向ふ處は我輩老者の妨ぐべき限りに在らずと雖も抑も今の日本ハ上流文明よして上邊富限の間よ遙ろよ人文進歩し下流よ漂ふものは一向此邊の事よ頓着なく規則を知らず條令を解せず一令一則の發布する毎ふ之れよ狼狽するの次第よして政府か一般人民よ向つて發したる條例の如きも上邊のものはこれを玩味して其意を悟り隨て用意も周到なるべけれど下流のものハ一向其理

由と解せず甚さしきハ發表の次第を知るの便宜を得ざるものさえあり、千百萬の資本を仰す都會紳士の大事業も、圖則二歩を元手として駄菓子を商きのふ田舎老婆の小賣商賣と其出願免許の手續よ、於ては彼れ是れ共よ公式の書面を差出し、扣へと云ひ証明と云ひ出願より指令の下る迄五通七通規則通りよ措書して扱、殿と様との書き誤りよ却下せられて一日を空ふとるが如きハ平日公邊の事に不案内なる田舎小民に珍らしうらず即ち文明流の規則の専ら大事よ便よして些細此事よ至極面倒なる處なり是れを喻への尙田畑よ蒸氣機關を据へ付たるり如し、渺茫一帯千百町の平地にハ文明機關を働か最も自在よして其效用も著しかるべしと雖も、一反三敵よ畔を疆り凸凹高抵一様ならざ

る場所に至つては至六利便の器械も却て任事に困難を生ずると一般文明の利便も時に少しく遠慮して規則道理の外に於て別な便宜の手段に依頼するは兎も其當坐の要にして此邊の事と就て我輩の所望を言へば一枕吏の下に接して小民の喜憂を察し利害の存する處に就て巨細を探り俗に所謂勝手向きの難易迄も注意して成宜く無益の奔命に疲れしめざる様手心を盡すに在り寛政の昔は江戸町奉行たりし遠山左衛門尉が能く民情を察して巧き方便を施したるの次第は當時天下此法度と稱して随分喧しき行儀作法に於つてこれに觸るゝものは悉く嚴刑に處せらるゝの法なるより世間の無事を戮めるに殺生の至りありて一旦公儀に於て刑を申付置き翻て陰かき手先は意を合

めて其執行を停めしめたるが如き即ち各吏の手心法を活かしして又能く情を慰めたるの妙手段、これを今日の書生論に云はしめば制度法律の曖昧不完備、素より値なき談なれども人間社會の術數より云ふときは不規則却て規則に優る利便ありと云ふべし然り而して今の日本社會を平均して人情の喜ぶ處に何れも在るうと言へば人心の過半は先づ以て古風を慕ふと云ふも可あらん何を以て之れを云ふや、手前の少年は七年間小學校を通學したれども未だ御上の御布告も解し申さずとて田舎の老爺が隣家翁に話を次第を見てと大概は推察すべし

右は文明流の民地に面白うらざる次第を述べたるものにして議論常々古風を偏し隨て文明士君子の美風を傷けた

るの嫌もあらん我輩の期する処にして要實際を求むるも在れば勢い斯の如くあらざるを得ず尙變相の談に就ては後よ説あり即ち學者貧究の話衛生亡身の説優勝劣敗の始末等ハ其重なるものとす

近來又道德の沙汰稍く顯敏も趣き議論次第も喧しきを催ふすの勢よしそ學者士君子の間も毎度物議此あることなるが顧ふも今日此議論の喧しも畢竟學者輩が世も徳風の衰えたるを心配したるものあらん或る論も曰く文明勢運の際に獨り智育も専らなるハ後來の爲めに善ならず宜しく是れも伴ふも德育を以てすべしとて智徳併進を以て教育の大本とす而して世の學者輩ハ皆此の理合を信して人間の智と徳との分別此あるものゝ如くも解せり是れ學者の

大不敏と云はざるを得ず何とあれば凡そ徳なるものハ人生智徳備らきに在つて存するものにして智識の完備は即ち道德堅固の異名ある事も論あるべがらず世の凡夫が時に不徳の舉動も及んで世論の咎めも遇ふハ畢竟智識の完全ならざるより然るものなれば我輩の所存は今の世も徳義を談するハ無用此事とを何となれば古への聖人の古への心を以て斯此事を論したるが故も價あるべしと雖も人々繁多の今の濁世千百萬言の道德論も其言ふ人の心腥きが故も價なし蓋し今の世も有智もして徳を談するものも無智もして解せざるものと平均して其不徳の分量は何れも重きやと云へば無智無識も罪なきハ疑ひもなき歎もして無智七過、有智四十九罪ハ人間の情勢も於て免るべか

らず故に我輩の今の世は道義を談するものを凡夫は恥と云ふ須く其顛末を講ぜん

道徳の大本及其勢力

古へ聖人賢哲と稱して世に教を垂れ人生を誠めたるもの西洋に「ソクラテス」、「アリストートル」、「マホメット」又近代に「カント」、「ヘーゲル」、「ミル」、「スペンサー」の如き東洋には「孔孟老莊」の如き即身成佛の釋迦、三位一躰の耶蘇の如き何れも道徳は大本即ち人間行爲の標準を示したるものあり

夫れ古道徳の事の其祖師の了見の大本存する處又其布教の手段に於ては人間社界の錯雜なる種々様々の方便利巧に依頼したる次第もあれば決して後世學者輩が談する如き一概の理論を以て答むべきものと非ず、今佛法を以て之れを見るに其教義は高尚なるに至つては深く禪觀の奥儀を體得して即身成佛の悟りを啓き、瞑目不言の裡に獨り淨土に照乾坤を形造つて天涯無量に至味を發見し宇宙の萬像、是空に歸して自ら清淨無垢の菩薩と化体するは妙靈深幽不可思議の哲理もあり又其容易なるに至りては地獄極樂の二界を見ては因果應報の理を悟り、凄まじき鬼界如く、慈悲仁愛なるは大菩薩の如く自から良心を訴へて徐ろに悔悟の念を開きて彌陀の本願を成佛するは工風もあり寂滅と云ひ粘繁と云ひ其間千萬の方便利巧もあると云れども何れも轉迷開悟の目的をあらさるゝるを要するも釋尊は大智識く活世界の雜錯を慮かつて此人事の階級に隨

したるものあらん
 宗旨此一様あらざる次第の斯の如しとして切轉迷開悟の
 目的どの如何、是れ即ち道德の大本、人間萬事の迷ひを轉し
 て清淨無垢の佛に化するに在り然らば天下の道德どの皆
 斯の即身成佛の義なるやと云ふは世の道義の主意素より
 斯の成佛の事は相違なしと雖も元來佛の義の只釋迦教の
 内を通申する迄のおとあれば其目的の兎も角も意味は於
 て頗る異なるもの、如し夫れ釋教は無垢此如來を想像して
 是れを人間行爲の標準となし斯の生をして斯の眞に近う
 しむるにあり、耶穌は自ら神と稱し衆生を濟度せん爲め
 一旦人界へ降りしどの主意を以て一心天愛の事を解し
 て諸の妄念を去らしむるに在り孔孟此教は堯舜なる至聖

至賢の君主を像造つて是れを萬靈の至尊とあし君臣父子
 の倫理を解き仁義忠孝此關係を論し心を正ふして身を脩
 め家も及ぼし國も及ぼし以て天下の秩序を齎ふるに在
 り、老子の道の道たるに天命を運ぶて大道に達するに在
 り、「ソクラテース」の以爲く人の行爲に必ず正鵠あつて是
 れに達せんとせば人生の智覺は行爲の正邪を區別するの
 靈あり、此靈を基いて正を就き邪を避くべしと解けり、「フ
 レト」の人生諸の嗜欲を絶ち世塵を脱して天上の神聖な
 通し淨清潔白にして染まざ穢れず以て本然の性も販り修
 行も偏せず快樂も流れず中庸以て理を悟るに在り、「ア
 スタートール」は曰く世の萬人全好む善あり是れ人間の幸
 福にして斯の幸福とは人生固有の性の完備せるを此を云

ふ其固有の性とは嗜欲も非ず恵きりも又「カント」へ「ゲル」の要するに世の中も普通の意思あり是れ道德の規律よし何事を此の法も随ふを善とし決して己れ一個の所存を運ばそべからずと、「ミル」の即ち人生の大目的の幸利よして效福なり然して又徳は巧利を生ずるが故も尊ぶべきものなれども人生の目的も非ず

「スベンサー」は近世哲學醇化説も原ひて徳の觀念は人生の苦樂も伴ふて次第も進化するものと説けり以上道義の大要として古人の説を摘襲したるものされば勿論其の説頗る奇きして當世の耳も解せざる向きもあらん是れの古人が單に時の社界の事相を基とし立論したるも有り或は故らも世の勢を察して起説したるとあり又

徒も厭俗の主義より漠然極樂世界を想像したるも有り孰れも古昔未開の世考探れ精じらざる時代此事なれば素より怪むに足らず

彼の「プレート」の如き浮世の凡夫を率ひて全く無欲の天涯に至らしむるが如き恰も人間社會と神仙界と混合したるが如し蓋し新舊教義の間も旨趣の異なるれ正しく人類活動の趣きも由て然るも此よして要するも古説の概ね己れを空ふするも在り中頃も至つて萬人全好の意思も徇ふに在り而して近代の巧利教の己れを實とし専ら幸福此事を説くも在り

人間行爲の事も就て古來道德の論する處大概斯の如しとして扱手此教義の人間社會は實相も如何ある働きをなし

たるやと云ふ素より千百年の久しき傳り其間人性の
 魂魄を支配するものと億萬試み聖佛二教も就て是れを見る
 る、基督由來猶太も生れしも時人の忌嫌觸れて遠く西方希
 臘の地方も行はれ以來全歐も善き上は帝家の儀式を司り
 て國君此行狀を制ま下も宣禮を傳えて人民信約の主宰と
 なり彼の羅馬法王の法權の絶大なるが如きは最も有名な
 話にして以て其一斑想ひ知るも足るべし又佛教は我輩東
 方人の知る如く其法印度の南方錫蘭の一島も起つてより
 北海萬里の日本へ渡り聖德太子此歸依を始めとし空海
 も云ひ親鸞と云ひ孰れも絶倫非凡の明識が一世身を沙門
 として布教開基の鴻業、併も靈驗著明として聖武次來歷
 代の至尊が剃髮經衣きて冥福を祈らせ玉ひし古例さえわ

つて土王室の貴尊より下百姓萬民も至る迄佛縁の結ばれ
 ざるなく黄金佛渡來の當時國分寺の繁昌も申すも更なり
 以來全國幾萬の寺院堂塔も光り輝く綿繡の職、描き拵りた
 る天女の柱、金銀を鑲め蓮臺の底も二世の巧徳を刻み籠
 る黄銅鑪の裡もは喜隨の涙の痕跡を鑄す、十萬億土の極樂
 と云ひ天涯萬里の淨土と云ふ慈悲の法界、全智全能通力
 自在どの佛の巧徳、十方世界も照臨も惡魔退治の靈驗も
 世間一般の信仰もして六尺の大丈夫時も錦の囊も觀世音
 を裏もて除災となし外道畜生たる牛馬の歴前もも立春大
 吉菩薩如來の符を封して魔除けとなし守護神となし以て
 安心したるが如きは所謂其末弊もして大聖釋迦牟尼佛が想
 ひ及ぶる處も迄信仰を催し極めて愚も陥つるものなら

ん免に角教義の大意が人間社會の根底へ貫き涉つたるに
 此宗教の一大手柄おして迎も後世に机上學者等が企て及
 ぶ處も非ず、抑も慈悲は法界とは世も上下貴賤の別差な
 皆是れ全等一體彌陀の本願も成佛するの謂もして公侯
 貴紳も悟らば佛、正夫匹婦も悟らば佛の主意なれに玉殿の
 裡ふも蓮花の臺あり三尺の裏屋もも沐香の馨きあり以て
 能く斯の濁世を濟み、斯れ凡夫を化し、吝嗇を廉よし懦弱を
 剛まし智慧あるものも有る丈けも利欲貪欲なき様も福な
 きものもなき丈けも盜も盜賊なき様も、所謂強勢弱服自然
 淘汰の無情をば斯の一法界に裡も包羅したるに感心至極
 の次第にし、當世の宣教師輩が徒も理論も拘泥し直接に
 社會改良杯を稱し甚だしきは塵影を傷くるも偶像玩具の

稱を以てするが如きは人間社會に實際を誤るものにして
 此輩は今斯の教の靈徳も對して大も疑つべし又大も發見
 する處あるべし

道徳布教も就て宗門の働きの斯の如しとして扱又學文の
 勢力如何と云ふも先支那流も就て見るも其祖師一身も經
 歴を言へば時恰も亂世もして天子用ゐず侯伯容れず聖人
 空しく路傍も吟ひ時としその仁者も依頼して寄食し時と
 しては樹下も問答し教を識り道を唱ふるも此は當時僅か
 も千有餘人の貧生も過ぎざる次第ありしも後世漸々其教
 の尊きを悟り終ひ中華四百餘洲文學の祖神と仰がれ勿論
 仁義の道は天下も二つなくして日本八道も普き文章博士
 歸朝以來の朝廷の文治専ら唐虞三代に制も則り千有餘年

來上流士君子の風儀大方儒流の誠むる處るとなり引ひて
 唐宋の學風藩制三百年大平の世も盛なりしと畢竟仁義の
 道の忽せにしられざりしを知るべし、又西洋賢哲の言行も於
 ても素より人間立志の教として嘉言善行の一般も模範と
 して世も尊れたるが中にも彼の「プロト」此如きの其身水
 火絶滅の焦土も遂はれて艱苦も終りまも其説後世の謹誠
 ともめて江湖一般も遵奉しよるが如し要する學文の働
 きは宗教の如く偉大ならずと雖も又能く上流智識君子の心
 を倍養したるや誇らんと云ふべし

教義の由來及本末の祖語

徳教此世も行はれたる次第の右の如しとして扱右の聖人
 が世も教を布きたる所以のと此は如何なる所存も原ひた

るものゝあるやと云ふも蓋し斯の一義は大も遠慮ある話に
 して世に聖人の道は隱匿不可思議杯を稱し容易に量る可
 からざるものとして故らも尊敬を表せるものゝ如し即ち
 聖人道德堅固の靈徳もして萬人の長縮する處、然りと雖も
 聖人も又是れ人間社會の一人もして其も不完全なる知量
 釋迦の明敏も基督の達識も其身は命數を知らざるのま
 三年未來の大難も容易も斷する能はず、況んや人生の此世
 も出でたる所以を知るに於てをや、己れも知らず人も知ら
 ず曖昧不可思議知らず識らずは身の弱點、日月星辰天跡も
 輝き、河海山川地上も顯れる、風雨雷震鳴動の奇、榮枯衰盛死
 生の觀、是れを識らざるは即ち人生の弱點もして無智の集
 合は轉じて貪欲の熱界となり、變じし利福の競争となり、流

れて強制服をかり引ひて優勝劣敗となり即ち弱存弱滅
 自然淘汰の無慈悲を存したる処にして聖人の患る處なり
 抑と世の優勝劣敗はたどえ古へ大平の時と雖も免るべし
 る処にして東方は強福弱貧の不公平あれば西方は威力
 偏重の不釣合あり一方は苦んで禍多く一方は樂んで幸ひ
 夥し、以て聖人を歎めしめ以て賢哲を憫ましむ以て俗塵を
 厭ふの詩人顯はれ以て浮世の無情を訴ふるの菩薩現はる
 盜跖富貴は長壽して顔回貧賤は夭死を、回の貧と跖は富と
 の十目の怪しむ處聖人此有機を見て如何の感あるや殊に
 顔回生れ乍らよして善根、微瑕なしと云ふ然るは貧苦も早
 世すどの何事ぞ正邪顛倒と言はんか善惡反應と云はんか濁世の
 大勢ハ斯の如きものは是れは大機の見像なりとて其心配を

大方ならず去りて此の始末の人間世界は於て調査の出
 來ざる限りの致し方あり斯此時は當つて智慧あり仁心あ
 るものは如何なる事をなすべきや今改めて釋すべき限り
 非ず

後世の學者聖人の教を以て争ふべからざる真理となすは
 一は不言は基くものにして不言といへ人世の平かあらざる
 を患ひて是れを濟はんとする大智の仁愛心に外ならず聖
 人と雖も人生の自然由來の幸福禍災を識らず、喩へり同日
 同刻は生れ來るとのに大名の若殿と乞食の兒ある因縁を
 人界の智慧よて調査するふと能はず苟も耳目口鼻の満足
 なる均等一體の五臓を備え並びに臭骸より裸體の儘よて
 生れ來る嬰兒にして其心事を問へり等しく無垢の魂魄共

此罪なき咎なき斯の小兒が成長して一方は錦繡を纏ふて
 玉殿に終り玉ひ一方の濫獲を蔽ふて階傍に斃る何の因縁
 予と菩薩如來が怪むと當然吾れ人共よ不審義は堪えず、乞
 食の胎内も宿る斯兒は生來何の罪あつと斯の不幸も陥る
 や天も向ふて説明を請ひ度き次第、人間須く同等の天賦を
 りせば上帝は分配不埒千萬と云はざるを得ざるの次第を
 あり旁々、見るよつけ聞えよつけ人生の活動する様は實に
 言語同斷よして正直潔淨の眼も見るを好まず人間の各目
 を附するよ不似合なる場合少ならず去りて斯の濁世罪
 人は世の智慧も及ばざるをて是れを放却せんる普通の人
 情より考ふるも相ひ濟まざる事况んや聖人佛の心をや直
 行横自言語を解し事物も顯敏なる斯は人類正しく萬物の

體をらば及ばん丈けは論も見ん佛の心聖賢の道、仁は云々
 義は未來の福壽界は無量の淨土山海の珍味供はらざるな
 く、現世の欲は風前には燈無常の風は時を嫌はず、慈悲は云々
 情けは云々天堂極樂の甘露の世界、十萬億土の黄金の臺、因
 縁と云ひ果報と云ひ外道と云ひ畜生と云ひ人間の面目の
 云々として東西時を異よし處を隔つと雖も人生の徳を勸む
 る慈悲の心は皆是れ全一よしを以て自然禍福は無情を濟
 ひるものなり

去り乍ら無智の熱界の無爲も化をへあらず感なき衆生は
 容易も濟度そへあらず須く奇異の行狀を示して世の耳目
 を買はざるべからず抑も齟齬の始まりよしして是れ又事情
 止むを得ざる處ならんや即ち方便此方便たる所以よしして

浮世の人情専ら利欲に狂奔する其中に居て獨り貨財を遠
 け榮耀を脱し天下の富豪貴族が遊興歡樂の最中、當つて
 獨り餓孚仙界を想像し焦熱地極の有様を圖書して未來の
 世界と稱し、美人の傍らに骸骨を書き黄金の裡らに六縉錢
 を書き故らに現世は事物を碎ひて徐ぞろよ人情の興を冷
 却せまむるの手段、凡夫と云罪人と云ひ或は宥め或は誡め
 妨げらるゝも意とあさず犯さるゝと怨みず笑つて囚ふ就
 き、泰然とし刑を斬らるゝが如き、實に非凡の舉働よし
 て一言一行尋常世俗は意表に出で終は後世傳えて神の再
 來佛の化身あまの俗諺をあたも畢竟此邊に感心よ基くと
 のよして偏し此の絶倫非凡の伎倆に在り世人既し古人の
 巧徳に感して聖賢言行の勝る儘に隨喜し只管其教を信し

て是れよ違はんことを畏れ一言一句も大切の金言として
 行爲一切古風に則り甚だしき、徒らに身軀を苦めて以て
 常人風俗を脱するとのとま嚴寒に垢離し暗室に斷食し苦
 行愈々難くして徳愈々高きとなし凡そ人生は出來ん限り
 の艱難辛苦を経て始て宇宙の大道は叶ふたるものとあ
 し獨り思へらく身の浮世の百穢汚の中に在り乍らと心身
 自りら清淨よしして心裡大悟の妙に入つたるものとなす
 以上は宗門上の話として扱又茲に賢哲の教を就て如何と
 云ふよ是れ又前後緩急の次第を誤るものなり古人が仁義
 禮信、天命嗜欲、良心本然、性情、等の字義を以て宇宙の萬像を
 牽き天下の事物を正邪二様の區別を劃し以て人事の標準
 を形作り嗜欲を制さゆる徳心の働きを土臺とし、邪正曲

直を一割と論きたるは當時の勢の然らしむる処如何と云
れば世未だ野蠻に在る社會の人文頗る簡陋なるとして人
生の腦裏單純なりとは賢哲の心と豫ての觀念なれば、徒ら
に審味を碎ひて意義の複雑を増し却て人をして其願未
成はしむるよりは圖書と等しき簡單至極の教を示し事物
の両端を區別して時人の了解を易からしめ以て徐るは善
惡の知慧を啓らしめんとの旨趣は基くも此なれば公を論
し私を論し君臣を論し父子を論し民庶士大夫の職務を云
ひ公侯相宰此機限と云ひ、孔氏の所謂堯舜禹湯の美政を形
造つて帝王君主此模範となし、春秋を作つて亂臣賊子の舉
動を確めたるが如き孰れも事の精確を撰んで立論しざる
は過ぎず然るは後世之れを學ぶもの偏は師道の有難きを

信し一割これを貫るんどの存願よりこれを守る事極めて
嚴格にして邪正曲直を一方は片附け其間少々の餘裕を剩
さず議論常に極邊を走り徒らに是非善惡を解するお切よ
して却て人事變化の味を玩悟せざるもの、如し故は後世
の學者は聖人此一言一行を以て無上の極意となし人界不
變の眞理として人たるものは斯の道を標準として寸毫背
かざるを以て畢世の面目としざるものならん夫れ後世の
學者が聖人の意を奉して之れを人間社會の實際と貫んど
して却て人事の錯雜を妨げられて其教の働を過ふる能
はざるは今日の實際を徴して明なる話あるか是れは素
より變通應用此義を知らざるは致す處あれば務めて應用
變化の手段を取るは今日の事あれども斯は廣く眼を放つ

て大なる宇宙の大勢を観察して其實際を云ふとき、今日古
 聖の金科玉條を談するも無用なり、應用變通などの時流の
 修辭論を道德沙汰一切萬事無益の心配と云はざるを得ず
 如何となれ、我輩今の世は道德論喧しかりしとて別段其
 効能を見たる事なし、又素より效驗のあるべき筈のもの
 非ず蓋し人生の心理は徳義の存滅に決して道德沙汰の言
 無し關するもの非ず尤も其證明は本篇破道の証は精細
 あり、茲は是れを贅せず然るは世の學者輩は漫ら道を講
 し徒ら議論を喧しくして却て其大義の等閑なるを氣
 附らざる、我輩の不思議とする處あり、且又近來識者の間
 は世の徳風の衰えたるを思へて之れを矯風せんとて頻り
 は心配を催ふす由あるが我輩を以てこれを見るは今此の

風儀の衰へたる心配より寧ろ却て之れを矯正せんとする
 議論の喧しきを恐るゝものあり抑も開國以來西洋風の
 思想次第は傳來し隨て日本固有の風儀も何となく不都合
 の様と感ずる折柄、耶蘇教の如き、俄るは日本古來は風物
 を異端現したるより増々世上の物議喧しく終はり道德の
 議論は論駁攻撃容易れものと心得へ無遠慮も不靈れ輩
 が勝手次第は説をあしむ世間を驚かしたるが如き人、道
 を解ひて却て人をして思ひ依らざる不徳を働かしめたる
 が如き皆是れ新道德論の罪と云ふべし政談をなし自由を
 論ずるは直接は人の美風を傷くるものあれども今の道德
 論の間接は人心を傷するものなり、道德の目的は修身を旨
 とし、身を誤らざる筈のものあるに今日の實際は於て

此議論は爲めよ却て身の始末を忘るゝもの、如し是れ他
 なし人間目的の根本を教えずして徒らに其枝葉を説くが
 故あり、道德の議論は如何に妙ありと雖も實際是れを行
 んどするに至つては、中々容易の事非ず蓋し今日の實際
 よ於て其容易あると困難なるとは其人の道德の進を解す
 ると解せざるに拘らずしと率る其智徳の肥瘠、如何在り
 て存するものなれば智徳を肥やすすの正は道義の根本よ
 して苟も是れを肥さんとならば千百萬の道義を談ずるを
 無用なり眞理審味は哲理を講ずるも又無益なり只人生の
 欲する處は隨て靜むる實利は存する處は就て是れを誘導
 するを最と肝要なり故に今の世に當つて徒ら西洋風の
 道德論を喧しくするは畢竟人をして其道の歸着する處よ

迷はしむるはと人生の本心は議論は隨て右左するものよ
 非す又素より斯の如き正直なるものよ非ず試み問ふべし
 彼の八爵議論の如き朝廷は爵位を人爲の爵と嘲つたるは
 本來何等の輩の口より出でしものなるや一方よは道義を
 切論し一方よは信仰を冷すが如き君等元來人間を何と見
 るや君等徳を論するは何の爲めなるや蓋し此邊の事を
 細かよ吟味するときは今日道德論を喧しくするは實る言
 ふべからざる處に禍害を醸造するものなれば道德の議論
 も政論と等しく制限を置きたき事なり
 天下の識者の此邊よ心配したることあるや否我輩の陰か
 よ掛念よ堪へざるあり

熱らく參するは當今宗教の風潮漸く不靈よして世間の

信仰次第に冷却するの有機、喧論區々徒らに辨駁を逞ふするが故に江湖の善男善女其教の歸する處を知らずして昨今中空に迷ふもの、如し抑も今日此不靈に立ち至りたる所以如何と云ふに要するは西教即徒等の無遠慮より來るものにして元來彼の輩は日本國へ布教の爲め來りたる筈あるも今其成績より見る時は彼等の軍る日本在來の徳風を荒さんとして來りたるもの、如し彼等は常に日本在來の事物を以て野蠻未開とあし無宗教國とあし佛陀神靈を嘲つて偶像とあし甚たしきは東洋風化臭俗と稱し風俗の上に臭の字を附して何れ醜しきもの、如くは暴言する杯實は言詞同斷の舉動と言はざるを得ず、斯る次第あれば日本の教門者も隨て辨駁を試み互に其短所を許さ合ふの

有機にして古來大切なる教を以て徒らに議論の材料と供するが如き驚き入る事供なり
 元來宗教の目的は前にも言へるが如く人生の徳を勸むる所存にして其手段方便の兎も角其目的とする處は皆是一にして其處は應じて夫れ其れ教義にあることあれば徒らに議論を催ふして他説を罵詈するが如きは決して宗教者たるもの、舉動は非と又素より宗旨の手段は非ず然るも今の基督教信徒は爲ら處を見るも徒らに他教を貶すを以て手捌の如くも心得え日本在來のものに見れは一も二もなく是れを譏諷し彼の居家處生法の如きを漫ら不幸なる生活杯と稱して未だ事跡の臭味を解せずして無遠慮も日本固有の美德を貶するが如きは即ち徒らに人の信仰

を妨ぐるものよして言はし基督の教を弘めんとしを却て基督の本願は戻るものと云ふべし我輩の斯る戻暴無慘の宗門の一日と早く國禁せられんとを願ふものあり否、彼れ等の迎も眞成の信徒を造る能はず何となれば彼れ等は最早既に宗教者たるの資格を失ふたればあり試み見るべし誰れが先祖の靈魂を穢がされて快しとせんや無宗國此輩民ならばいざ知らし苟も國教は在つて是れは歸依する良民、文明熱は狂奔する世の狼狽者流はいざ知らし苟も世の事跡を解する眞成の士人、我輩は一日と早く流行此輩霧霽れを眞日本の色顯はれん事を願ふのみ且又是の教と稱するものゝ本來不完全なる人生を目的としたるを此れれば敢て道理一偏は拘はるものよ非を理論の

外に味ひを存して其宗旨は縁を結ぶに在ればたとへ政府の許なればとて僧侶は身分としを肉食帯妻を公行するに甚た移りならず勿論道理上決して咎むべきよ非すと雖も苟も衆生濟度の任たる限りは要、凡夫の信仰を冷さざる在るとなれば今日浮世の百性未だ此邊の道理を解せざる僧侶の行爲早く道理の街に運動するが如きは事の緩急を誤るものと云ふべし佛者若し今日の衰頹を歎むば狼りよ他教の攻撃も可惜日子を費さんよりは寧ろ自ら守る處あつて然るべし西教傳來して以來宗教は物議喧しと雖も佛法の佛法よして數千年來の因縁決して淺からず釋尊は深理は以て上流智識の縁を結ぶよ辱るべし如來の功德の以て濁世の凡夫を隨喜せしむるよ辱るべし慈悲の法界

は闢くして十億の衆生を容るゝも足るべし未來の福徳海
は無量にして熱界の瑠魄を販すも足るべし徒ら宗教改革
等の不意の言を述べす勿れ尙實際論は是れを本論と開述
すべし

文明疑問序論終

明治廿一年四月十七日印刷
同年四月二十日出版郵籍

(定價十三錢五厘)

著者兼
發行者

鳥取縣平民

松原 巖五郎

麴町區飯田町五丁目廿五番地
山崎徳太郎方寄留

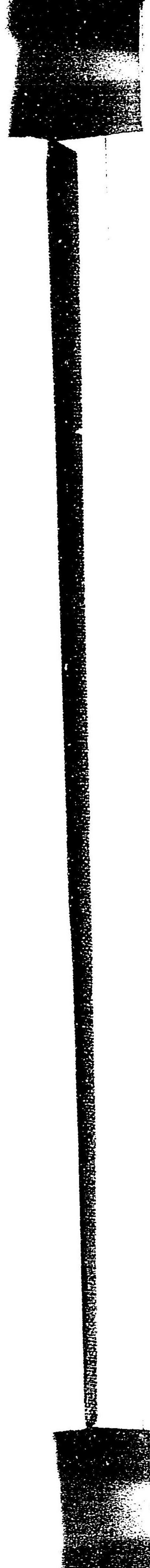
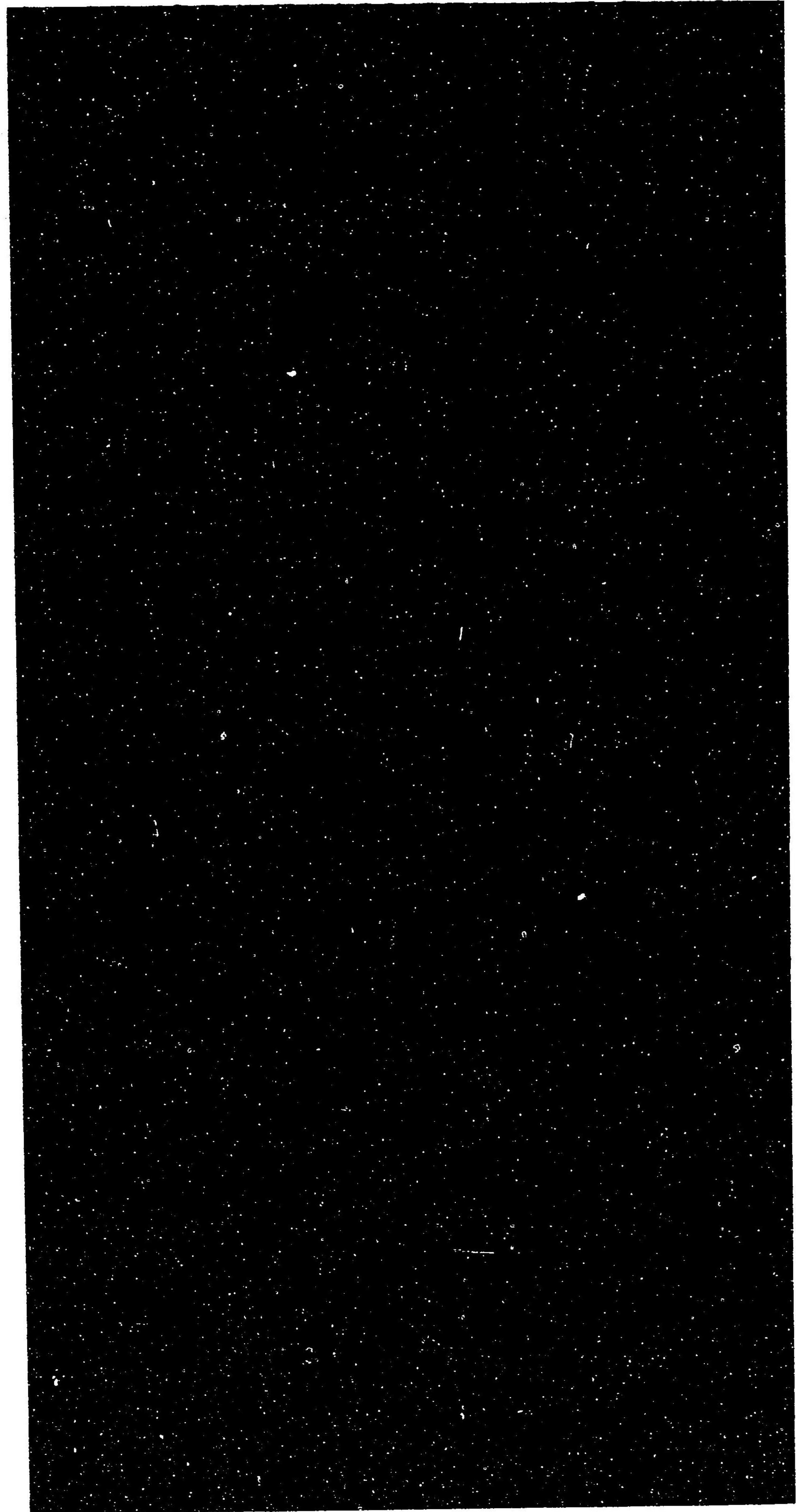
宮城縣平民

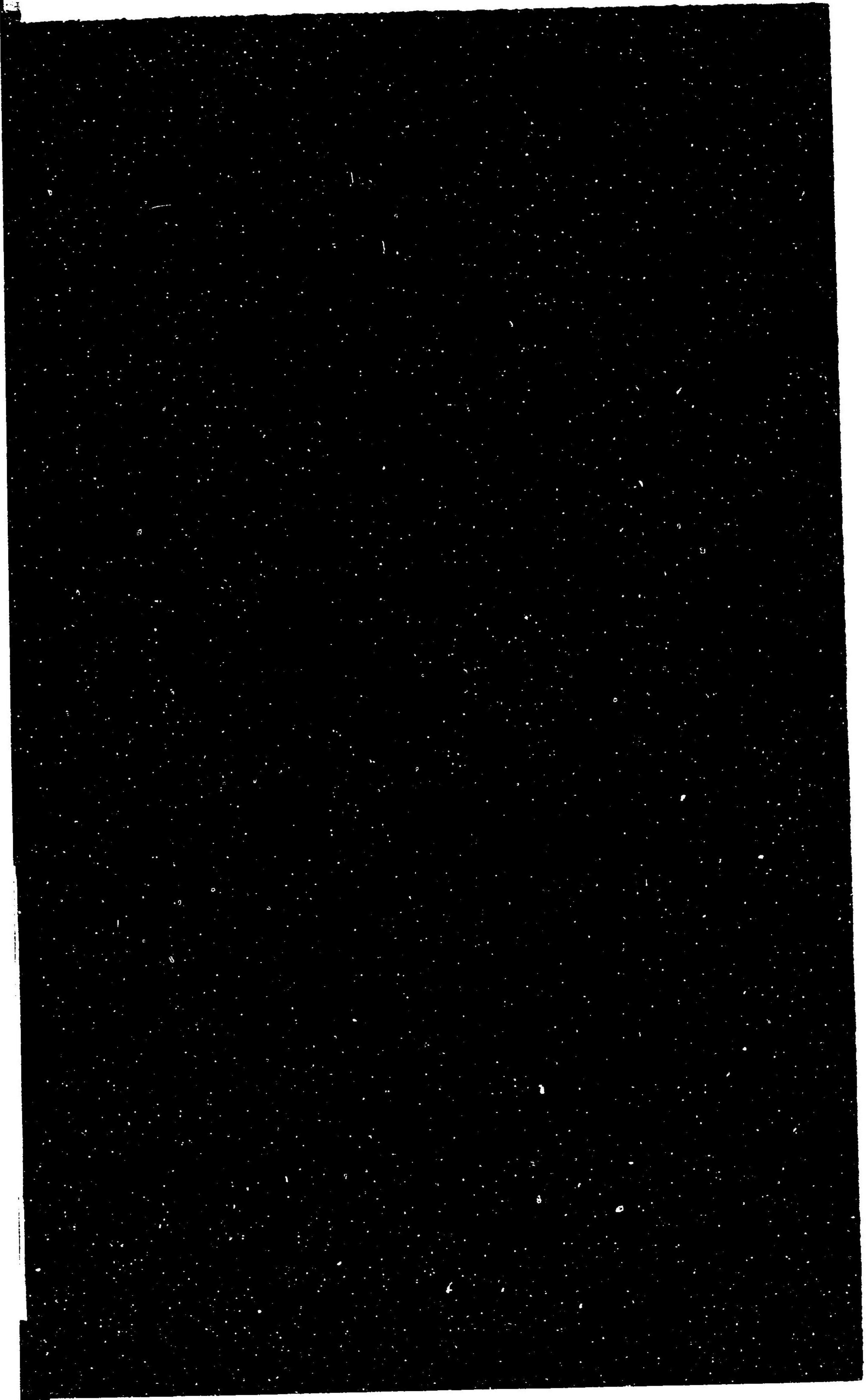
印刷者

佐藤 盈三

日本橋區新石衛門町十番地
寄留

NEXT - 1/2





19

144

文明疑問上
松原 岩五郎

国立国会図書館

039703-000-8

19-144

文明疑問

松原 岩五郎/著

M21.4

BDA-0288

